



DRESDNER PHILHARMONIE

Chefdirigent: Jörg-Peter Weigle

1993 JAPAN

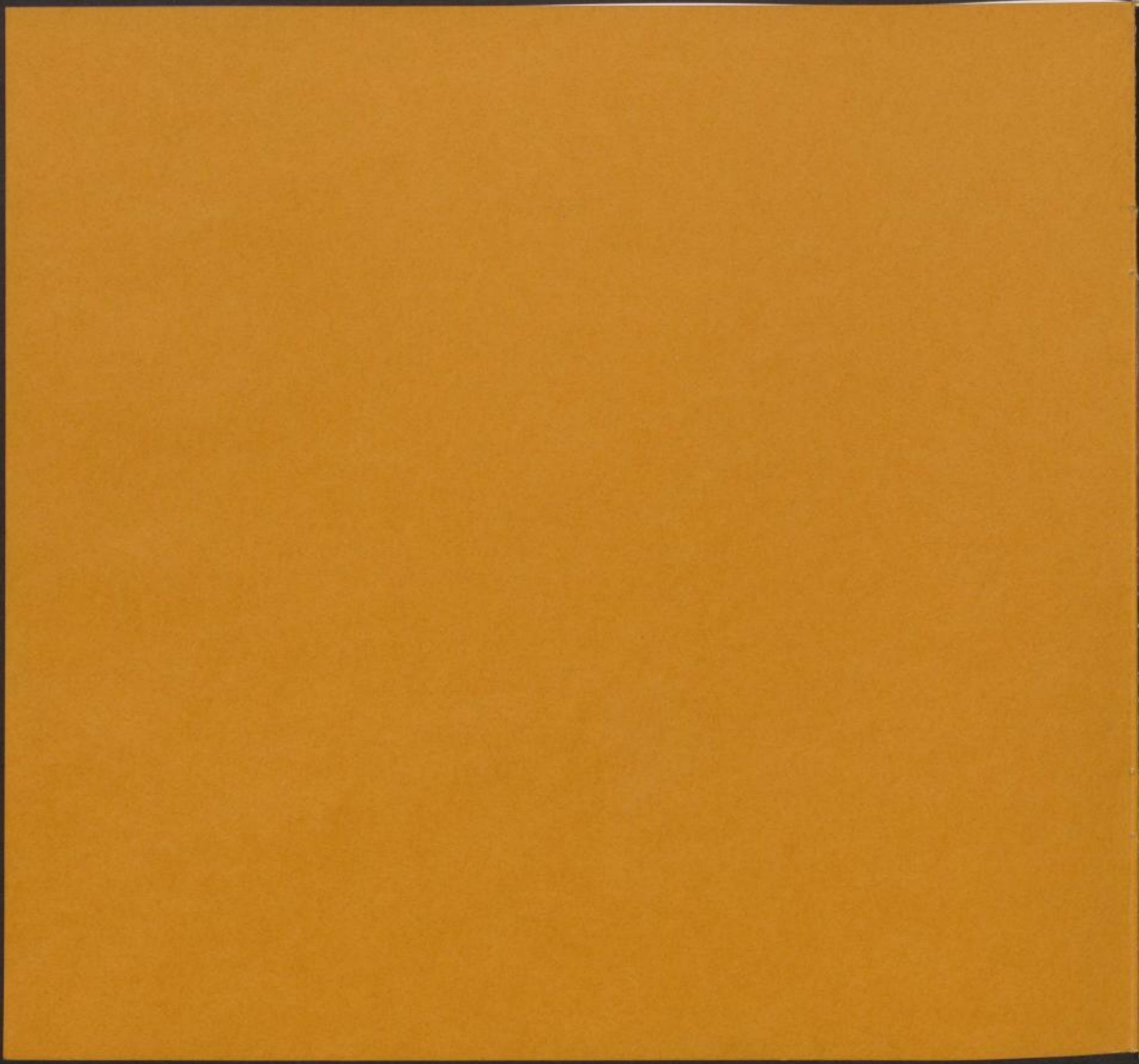


SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



DRESDNER PHILHARMONIE



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie

CBCオーケストラシリーズ#46

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

首席指揮者：イヨルグ・ペーター・ヴァイグレ

●1993年日本公演スケジュール●

3月

| | | | | | プログラム |
|----|-------|----------------|---------|------------------------|-------|
| 3 | 日 水 仙 | 台：仙台市青年文化センター | 19:00開演 | 主催=東北放送 | A |
| 4 | 日 木 東 | 京：サントリーホール | 19:00開演 | 主催=中部日本放送 | B |
| 5 | 日 金 東 | 京：サントリーホール | 19:00開演 | 主催=中部日本放送 | C |
| 6 | 日 土 東 | 京：昭和女子大学人見記念講堂 | 18:00開演 | 主催=中部日本放送 | D |
| 7 | 日 日 大 | 阪：フェスティバルホール | 15:00開演 | 主催=フェスティバルホール 朝日友の会 | E |
| 8 | 日 月 岡 | 山：岡山シンフォニーホール | 18:45開演 | 主催=㈱天満屋 | A |
| 10 | 日 水 広 | 島：広島厚生年金会館 | 18:45開演 | 主催=中国放送 | F |
| 11 | 日 木 名 | 古屋：愛知県芸術劇場 | 18:45開演 | 主催=中部日本放送 | C |

招へい・提供= **中部日本放送**

CBC



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie

Message



We are highly honoured to be able to sponsor the concerts by the Dresdner Philharmonie to be held in Japan, with performances in a number of cities, as the 46th event of the CBC Orchestra Series.

The city of Dresden, located in the former German Democratic Republic, has long been known both at home and abroad, as a major cultural center, often called Florence on the Elbe. Now that the two Germanys have been reunited, the renewed musical excellence of the Orchestra, after sharing much of its time with its hometown, is today ever more appreciated all over the world, under its new and energetic principal conductor Jörg-Peter Weigle. It is our sincerest hope that you will enjoy the perfect blend of traditional heritage with blossoming sensitivity, which distinguishes the Dresdner Philharmonie from other orchestras.

Kazuo Takahashi
Chubu-Nippon Broadcasting Co., Ltd
President

今回CBCオーケストラ・シリーズの第46回として、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団の来日公演を、各地で開催する事ができ非常にうれしく思っております。

旧東ドイツに属するドレスデンは、エルベ川のフィレンツェと称される一大文化都市として、古くより内外に名を知られてきました。ドイツ統一がなされた今、この町の歴史を支えてきたこのオーケストラも新鋭の首席指揮者ヴァイグレ氏のもとで瑞々しい響きを聞かせ、世界的に評価を高めております。文化的伝統の深みと若々しい感性が絶妙にブレンドされた、ドレスデン・フィルならではの演奏を心行くまでお楽しみ下さい。

中部日本放送
代表取締役社長 高橋一夫



Mein Willkommensgruß gilt der Dresdner Philharmonie und ihrem Dirigenten Jörg-Peter Weigle zum Auftakt ihrer diesjährigen Gastspielreise. Die Dresdner Philharmonie ist die jüngste der vier Säulen des Musiklebens ihrer Vaterstadt, die schon im späten Mittelalter in das helle Licht der abendländischen trat. Die sächsische Hauptstadt ist heute wieder ein Zentrum der europäischen Musikpflege. Ein Aufenthalt in Dresden ist stets ein bedeutungsvoller Abschnitt im Lebenslauf eines Musikers.

Der Japan-Besuch der Dresdner Philharmonie steht in der Tradition einer lebhaften Gastspieltätigkeit, die das Orchester schon bald seiner Gründung im Jahre 1870 entfaltete. Persönlichkeiten mit klangvollen Namen hatten die Leitung, und prominente Gastdirigenten begleiteten am Pult seinen raschen Aufstieg zur Weltspitze.

Im Jahre 1986 wurde der erst 33jährige Jörg-Peter Weigle in die Chefdirigenten-Position berufen. Er wird uns diesmal Mozart, Beethoven und Brahms beschenken.

Die Dresdner Philharmonie tritt nicht zum ersten Mal in Japan auf. Daß es das erste Mal seit dem historischen Ereignis der Vereinigung ist, erfüllt uns alle mit besonderer Genugtuung.

Wilhelm Haas
Botschafter der
Bundesrepublik Deutschland

この度、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団の日本公演の幕が切って落とされますことに対し、同管弦楽団とその指揮者、イヨルグ・ペーター・ヴァイグレ氏に心よりお祝いの言葉を申し述べたく存じます。

ドレスデンは、早くも中世後期には西洋の音楽史にその名を轟かせておりますが、同管弦楽団は、そのドレスデンの音楽界を支える四本の柱の中で、最も若いものであります。ザクセン州の州都であるこの町は、今日では再びヨーロッパの音楽を担う中心となっております。同市で研鑽を積みますことは、音楽家の経歴の中で重要な節目となるものです。

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は、創立の年である1870年直後から、盛んに外国公演を行って参りましたが、同管弦楽団の来日公演は、その伝統の一環となっているものであります。輝かしい名声を誇る何人もの人々が同管弦楽団の指揮を担当し、著名な客演指揮者たちによって、瞬く間に管弦楽団としての世界のトップに踊り出たのであります。

1986年には、若干33才のイヨルグ・ペーター・ヴァイグレ氏が首席指揮者に任命され、この度の公演ではモーツァルト、ベートーベン、ブラームスの作品を披露してくれます。

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団の日本公演は、今回が初めてではありませんが、歴史的な統一後の初来日ということに、私共は特別な満足感を覚えております。

ドイツ連邦共和国大使
ヴィルヘルム・ハース

Die Dresdner Philharmonie ist nun wieder bei Ihnen zu Gast und erinnert sich mit Genuß an den schönen Empfang, der ihr bei ihren früheren Besuchen zuteil wurde.

Wir hoffen, durch die Vermittlung unserer Kulturtradition den japanischen Hörern die gleiche Freude zu bringen, die wir empfinden, wenn wir unsere Musik interpretieren.

Dr. Olivier von Winterstein
Dresdner Philharmonie
Intendant

Olivier von Winterstein



ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は、今再び来日する事になり、先回の来演の際に、日本の皆様に頂いた素晴らしい歓迎を、喜びと共に思い起こしております。

私達は、ドレスデンの文化的伝統を伝える事によって、私達が音楽を理解し演奏するときを感じる喜びそのものを、日本の聴衆の皆様にも感じて頂ける事を願っております。

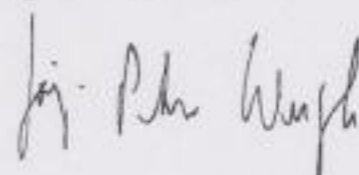
ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団
総裁

オリヴィエル・フォン・ウィンターシュタイン

Zu unserer 6. Japan-Tournee grüße ich Sie herzlich.
Auch für ein Traditionsorchester wie die Dresdner Philharmonie ist so eine Konzertreise immer wieder eine Besonderheit. Ich freue mich, daß wir mit unseren Konzerten wieder Ihr Interesse gefunden haben. Die Tatsache, daß sich aus den sporadischen Anfängen eine gute Tradition entwickelt hat, spricht ihre eigene Sprache. Es zeigt uns, daß europäische Musik in Japan mit großem Interesse aufgenommen wird.

Ich wünsche Ihnen ein wunderschönes Konzerterlebnis

Jörg-Peter Weigle
Dresdner Philharmonie
Chefdirigent/General music director



私どもの6回目の来日公演を迎えるにあたって、皆様に心から敬意を表します。ドレスデン・フィルのような伝統あるオーケストラにとっては、コンサート・ツアーというのは今もって特別の事です。日本の皆様に、再び我々のコンサートに関心をもって頂き、うれしく思っております。散発的な起源発生が、やがて良い伝統として育ってくるのだと言う事実は、その伝統が持つ言語にも表れています。そしてこの事は我々に、日本でヨーロッパ音楽が大きな関心を持って受け入れられ続けるだろう事をも示してくれます。

皆様に素晴らしい演奏会を楽しんで頂けますようお願いしております。

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団
首席指揮者

イヨルグ=ペーター・ヴァイグレ



ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団
DRESDNER PHILHARMONIE

「エルベ河畔のフィレンツェ」と呼ばれる、豊かな芸術的土壌のドレスデンに、1870年に創立される。早くから音楽文化使節として外国に出ており、19世紀中に既にベテルスブルグ、ワルシャワ、アムステルダムなどで演奏した。

当初は、その本拠地になんて「商工会議所オーケストラ」と呼ばれ、チャイコフスキー自身の指揮で彼の第4番、ドヴォルザークの指揮で、その第5番を演奏した歴史がある。その他、ブラームス、ハンス・フォン・ビュロウ、リヒャルト・シュトラウス、アントン・ルービンシュタイン、フェルッチョ・ブゾーニ、ラフマニノフ、サラサーテ、グライスラー、パブロ・カザルス、シグリーッド・オネーギンなどと共演してきた。

1915年「ドレスデン・フィルハーモニー・オーケストラ」を正式名称とし、1924年には「ドレスデン・フィルハーモニック」に改称。音楽指揮者はエドゥアルト・メーリケ、1934年にはオランダ人、パウル・ヴァン・ケンペンがオーケストラを受け継ぎ世界的な名声を確かなものとした。

1945年2月13日のドレスデン陥落で、ドレスデン・フィルは記録やライブラリーとともに、表年の世帯を失ったが、第二次世界大戦終了後、直ちに演奏活動を再開、1947年ハンス・ボンガルトがオーケストラの芸術監督を受け継いで、17年におおってその職を奪い、芸術的軌程を遂げる。

1967年から国際的な名声を持つアルト・マズアが監督を奪い、その後ギュンター・ヘルビッツ、ヘルベルト・ケーゲルに受け継がれ、1985年以降イコアル・ペーダー・グエイグレが音楽指揮者を奪って、伝統の中に若く出る新鮮な響きをもたらして好評を得ている。



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



イヨルグ・ペーター・ヴァイグレ (首席指揮者)

JÖRG-PETER WEIGLE

イヨルグ・ペーター・ヴァイグレ程急速に指導的立場に立ち、目標に恵まれた若い指揮者は滅多にない。27歳の時彼は、ヨーロッパのトップ・ヴォーカル・アンサンブルのひとつライブチヒ放送合唱団に入団、33歳でドイツのトップ・オーケストラのひとつドレスデン・フィルの指揮者になり、35歳の若さで、音楽総監督の職についた。

彼はいつも、全体を把握した音楽造りとともに、若さ溢れる新鮮さと気迫で聴衆を圧倒する。音符に対する繊細な感覚を重視し、全体的な効果を見失う事無く、周到に細部を作り上げていく。

ヴァイグレは1953年グライフスバルトに生まれた。彼の成長過程には、1963年から1971年のライブツィヒ・トーマス教会聖歌隊在籍が大きく寄与しており、1969年から1971年までの総裁エドハルト・マウアースベルガーによる指導が彼の合唱指揮の才能を開花させた。これはまた、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学でホルスト・フェルスター、放送合唱団首席指揮者で、有名なベルリン「歌唱学校」の監督でもあるディートリッヒ・クノーゼ、作曲家ルート・ツェヒリン等の教授のもとで受けた徹底的な音楽訓練の賜物でもある。1980年彼はライブツィヒ放送合唱団の指揮者となり、1985年にはその首席指揮者となった。

サー・コリン・デービス、ネヴァル・マリナー、クルト・マズア、ペーター・シュライアーその他の指揮のもとでの、ラジオやレコードのための録音、演奏作品が、彼の名声を天下に知らしめた。現在ヴァイグレはドレスデンフィルとともに、録音活動を続けており、ドレスデンでの新プログラムの開拓の他、毎年何回かは国の内外での客演をこなしている。



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



ペーター・レーゼル (ピアノ・ソリスト)

PETER RÖSEL

ペーターレーゼルは、指揮者と歌手を両親としてドレスデンに生まれ、6才の時に始めてピアノの授業を受けた。モスクワ・チャイコフスキー・コンセルヴァトリウムの5年の課程を卒業したが、在学中には、すでにモスクワ・チャイコフスキー・コンクールとモンリオール・ピアノ・コンテストに入賞しており、国際的な活動を始めていた。

卒業後、ザルツブルグ、エディンバラ、ロンドン・プロムス、パース、ハリウッド・ボウル、香港と言った国際的フェスティバルに参加、またロサンゼルス、ロイヤル・フィルハーモニック、モンリオール響、デトロイト響、モスクワ・フィル、ベルリン・フィル、ドレスデン国立歌劇場などの著名なオーケストラに欽待され、デュトワ、ハイティンク、ケンベをはじめ数々の名指揮者たちと共演してきた。

60年代にはライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団及び、クルト・マズアと密接な音楽的關係ができ、それ以来彼とは国際的な場で200回以上のコンサートを行っている。

レコードではEMI、カプリッツィオ、徳間などのレーヴェルで広くベートーヴェン、ウェーバー、ラフマニノフのピアノ・コンチェルトから、ブラームスのピアノソロ作品、様々なコンビネーションによる室内楽までを録音、同時代の名ピアニスト達の広く分散したジャンルを網羅している。

宮本文昭 (オーボエ)

1949年東京生まれ。父はテノールの宮本正。少年時代の宮本は、アメリカン・ポップスやFENを聞いて過ごす。15才の時、父がNHK交響楽団と共演した「第九」を聞いて鳥肌が立つほど感動し、クラシック音楽への道を歩み始めた。

1968年桐朋学園高校音楽科を卒業時「音楽賞」を受賞し、同年西ドイツ、デットモルト市の北西ドイツ音楽アカデミーに入学、オーボエでヘルムート・ヴィンシャーマンに師事した。当時の思い出として宮本は、「難しいものを難しく人に聞かせてはいけない」、「何を演奏しても詩がある演奏をしなさい」と言う教えが、いちばん印象に残っていると語っている。在学中に全西ドイツ音楽アカデミー・コンクールのオーボエ部門で第2位を受賞した。

1975年に、彼はエッセン市立交響楽団首席オーボエ奏者に就任、同年ファゴットの岡崎耕治等とニュー・ディメンションを結成し、ヴァイマル木管アンサンブル・コンクールで第2位を獲得した。1977年から、フランクフルト放送交響楽団首席オーボエ奏者、1982年にはケルン放送交響楽団首席オーボエ奏者に就任、その一方でドイツ・バッハ・ゾリステンやシュトゥットガルト・バッハ・アンサンブルのソリストを務めた。

レコードでは、井上直幸との共演による「オーボエの至芸」やビヒト・アクセンフェルトと共演した「オーボエの世界」などのほか、オーボエの新たな可能性を求めて前田憲男と共演した「JAZZY WIND」、「ロマネスク」の2枚はクラシックとジャズの境界を越えた作品として大好評を博した。また純クラシックの分野でもロンドン室内管弦楽団との「モーツァルト／オーボエ協奏曲」及び「フルート協奏曲のオーボエ版」をレコーディングし、この楽器にエポックをもたらした。





瓜生幸子 (ピアノ)

東京芸術大学、ウィーン国立大学卒業。Kunstlerische Reife賞受賞。故ザイドル・ホファ教授と故クラウディオ・アラウ氏に師事した。1966-67年度より毎シーズン、イギリス、スイス、オランダ、ドイツ、オーストリア等、ヨーロッパ各地で演奏活動を行っており、1972年には、外務省文化使節としてエチオピアで、同国皇帝御臨席のもとにリサイタルを行う。1972年からは、ウィーンにおける国際ベートーヴェン・コンクールに審査員オブザーバーとして出席しており、1982年にオーストリア政府より国家勲章「勲三等宝冠賞」を叙勲、1986年ウィーン・コンツェルトハウスでのリサイタルにはオーストリア大統領も臨席した。1987年4月サントリーホールのリサイタルがテレビ放映され、サントリーホールでは、1990年3月、5月にもリサイタルを開催した。

そのほか彼女は日欧文化協会運営委員会、国際スタインウェイ・アーティスト、昭和音楽大学教授をも務めている。



DRESDNER PHILHARMONIE

Chefdirigent: Generalmusikdirektor Jörg-Peter Weigle

Intendant: Dr. Olivier von Winterstein **Chefdramaturg:** Prof. Dr. Dieter Härtwig

1. Violinen

Ralf-Carsten Bromsel (KM)
Walter Hartwich (KV)
Thorsten Janicke (a.G.)
Gerhard-Peter Thielemann (KM)
Siegfried Koegler (KV)
Siegfried Rauschhardt (KM)
Philipp Beckert
Siegfried Kornek (KV)
Eberhard Schrimpf (KV)
Günter Hensel (KV)
Erich Conrad (KV)
Jürgen Nollau (KM)
Volker Karp (KM)
Gerald Bayer (KM)
Roland Eitrich (KM)
Heide Schwarzbach (KM)
Heiko Seifert
Christoph Lindemann
Beate Haubold

2. Violinen

Eberhard Friedrich (KV)
Dieter Kießling (KV)
Klaus Fritzsche (KV)
Günther Naumann (KM)
Herbert Fischer (KV)
Jürgen Brömsel (KV)
Egbert Steuer (KV)
Erik Kornek (KM)

Dietmar Marzin (KM)
Reinhard Lohmann (KM)
Viola Reinhardt (KM)
Steffen Gaitzsch (KM)
Dr. Matthias Bettin
Andreas Hoene
Andrea Steuer
Constanze Nau

Bratschen

Herbert Schneider (KV)
Dorothea Jende
Hubert Gräf (KV)
Wolfgang Boßelmann (KV)
Alfred Wahl (KV)
Johannes Bettin (KV)
Manfred Vogel (KV)
Gernot Zeller (KM)
Lothar Fiebiger (KM)
Wolfgang Haubold (KM)
Holger Naumann (KM)
Steffen Seifert
Steffen Neumann
Andree Hofmeister
Heiko Mürbe

Violoncelli

Matthias Bräutigam (KM)
Ulf Prella
Erhard Hoppe (KV)

Peter Doß (KV)
Petra Willmann
Thomas Bäß (KM)
Frieder Gerstenberg (KV)
Wolfgang Bromberger (KM)
Siegfried Wronna (KM)
Friedhelm Rentzsch (KM)
Rainer Promnitz
Karl-Bernhard von Stumpff
Clemens Krieger

Kontrabässe

Heinz Schmidt (KV)
Peter Krauß (KV)
Tobias Glöckler
Berndt Fröhlich (KV)
Roland Hoppe (KV)
Eberhard Bobak (KV)
Norbert Schuster (KM)
Bringfried Seifert
Tilo Ermold
Donatus Bergemann

Flöten

Birgit Bromberger (KM)
Sabine Kittel
Götz Bammes (KM)
Karin Hofmann
Helmut Rucker (KV)

Oboen

Gerhard Hauptmann (KV)
Guido Titze
Wolfgang Bemann (KV)
Jens Prasse
Gerd Schneider (KV)

Klarinetten

Werner Metzner (KV)
Hans-Detlef Löchner (KV)
Henry Philipp
Dittmar Trebeljahr
Klaus Jopp

Fagotte

Hans-Peter Steger (KV)
Michael Lang (KM)
Hans-Joachim Marx (KV)
Günter Köthe (KV)
Mario Hendel

Hörner

Volker Kaufmann (KV)
Dietrich Schlät
Lothar Böhm (KV)
Peter Graf (KV)
Karl-Heinz Brückner (KV)
Werner Nixdorf (KV)
Klaus Koppe
Uwe Palm

Johannes Max

Trompeten

Mathias Schmutzler (KM)
Csaba Kelemen
Wolfgang Gerloff (KV)
Michael Schwarz (KV)
Roland Rudolph (KM)

Posaunen

Joachim Franke (KM)
Olaf Krumpfer
Reinhard Kaphengst (KM)
Dietmar Pester

Tuba

Martin Stephan (KV)

Harfe

Nora Koch

Pauken und Schlagzeug

Bernhard Schmidt (aG)
Karl Jungnickel (KV)
Gerald Becher (KM)
Axel Ramlow (KM)

Tasteninstrumente

Ingeborg Friedrich

Orchestervorstand

Volker Karp
Klaus Koppe
Günther Naumann

Orchesterinspektor

Matthias Albert

Orchesterwarte

Herybert Runge
Bernd Gottlöber
Helmut Friemel

Chordirektor (Philharmonischer
Chor und Kammerchor)
Matthias Geissler

Inspizientin
Angelika Ernst

Chordirektor (Philharmonischer
Kinder- und Jugendchor)
Jürgen Becker

Assistentin und Inspizientin
Barbara Quellmelz

KM=Kammermusiker
KV=Kammervirtuos
aG=als Gast



PROGRAM

A

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

歌劇「フィガロの結婚」序曲
Ouvertüre "Le nozze di Figaro"

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

交響曲 第40番 小短調 K.550
Sinfonie Nr. 40 G-moll K.550

L.v.ベートーヴェン
L.v.Beethoven

交響曲 第3番 変ホ長調「英雄」 op.55
Sinfonie Nr.3 "Eroica" E#-Dur op.55

B

L.v.ベートーヴェン
L.v.Beethoven

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調「皇帝」 op.73
Konzert für Klavier und Orchester Nr.5 "Kaiser" E#-Dur op.73
(ピアノ・ソリスト：ペーター・レーゼル)

L.v.ベートーヴェン
L.v.Beethoven

交響曲 第7番 イ長調 op.92
Sinfonie Nr.7 A-Dur op.92

PROGRAM

C

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

交響曲 第39番 変ホ長調 K.543
Sinfonie Nr.39 E#-Dur K.543

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

オーボエ協奏曲 ハ長調 K.314
Konzert für Oboe und Orchester C-Dur K.314
(オーボエ・ソリスト：宮本文昭)

J.ブラームス
J.Brahms

交響曲 第4番 ホ短調 op.98
Sinfonie Nr.4 E-moll op.98

D

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

歌劇「フィガロの結婚」序曲
Ouvertüre "Le nozze di Figaro"

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

ピアノ協奏曲 第26番「戴冠式」ニ長調 K.537
Konzert für Klavier und Orchester Nr.26 "Krönung" D-Dur K.537
(ピアノ・ソリスト：瓜生幸子)

L.v.ベートーヴェン
L.v.Beethoven

交響曲 第3番 変ホ長調「英雄」 op.55
Sinfonie Nr.3 "Eroica" E#-Dur op.55

PROGRAM

E

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

交響曲 第39番 変ホ長調 K.543
Sinfonie Nr.39 E#-Dur K.543

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

オーボエ協奏曲 ハ長調 K.314
Konzert für Oboe und Orchester C-Dur K.314
(オーボエ・ソリスト：宮本文昭)

L.v.ベートーヴェン
L.v.Beethoven

交響曲 第3番 変ホ長調「英雄」 op.55
Sinfonie Nr.3 "Eroica" E#-Dur op.55

F

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

歌劇「フィガロの結婚」序曲
Ouvertüre "Le nozze di Figaro"

W.A.モーツァルト
W.A.Mozart

交響曲 第40番 ト短調 K.550
Sinfonie Nr.40 G-moll K.550

J.ブラームス
J.Brahms

交響曲 第4番 ホ短調 op.98
Sinfonie Nr.4 E-moll op.98

●W.A.モーツァルト／歌劇「フィガロの結婚」序曲

「フィガロの結婚」はモーツァルトのオペラブッフアの傑作であり、横暴な貴族をやり込めようとするフィガロとその許嫁スザンナの活躍を軸に、夫婦や親子の情愛をも絡ませながら、新旧の時代の交錯や人間関係の機微を生き生きと描いている。序曲はオペラそのものの音楽とは関係のない素材によって構成されているが、沸き立つようなリズムが一気に駆け抜ける音楽には、はつらつとしたドラマの世界を一気に開くようなエネルギッシュな爽快感がみなぎっている。

●W.A.モーツァルト／交響曲第39番 変ホ長調 K.543

1788年の夏、モーツァルトは3曲の交響曲を、ほぼ二ヶ月の間に作曲した。予約演奏会の不人気というかたちでウィーンの聴衆のモーツァルト離れもはっきりと現れ、暗い晩年の影が忍び寄って来た夏である。作曲の経緯に関しては上演の記憶すら残されていないため、苦しい経済状況をしのぐためと推測しておく外はないが、確かなことは、この3曲はそれぞれの性格において古典派交響曲の究極のすがたを示していることである。

6月26日に、あの可愛らしいハ長調のピアノソナタと共に書き上げられた変ホ長調の交響曲は、通常のオーボエに変わってクラリネットが用いられ、その音色が晴れやかな曲調のなかに柔らかい奥行きを与えている。

第1楽章は緊張感を持った序奏に始まり、主題の柔らかな旋律との鮮やかな対比の妙に持ち込まれる。第2楽章では素朴な主題が徐々に表情を深めてゆき、トリオが香るような優雅さをふりまく第3楽章を経て、音楽的運動性と古典的な構成感が緊密にむすばれたフィナーレとなる。

●W.A.モーツァルト／交響曲第40番 ト短調 K.550

ト短調は「第39番」のほぼ一ヶ月後、1788年の7月25日に作曲されており、最後の交響曲群の中では唯一死の年の春に演奏された可能性が具体的に指摘されている。前作とは対照的に、ト短調という調性といいティンパニーとトランペットを欠く編成といい、すべては内省的な精神の表現のために捧げられた音楽である。なお、この曲の管楽器パートにはオーボエによるものとクラリネットによるものとのふたつの版が残されているが、近年ではより表情の濃いクラリネット版が用いられることが多い。

第1楽章はよどみのない音楽の流れの中で悲劇的なバトスを感じさせる主題が展開され、その気分は穏やかな第2楽章のいささか重い足どりのなかにも持ち込まれていく。第3楽章の、メヌエットとしては異例ともいえる引き締まった雰囲気を受けて、音楽は緊迫した表情が対位的に展開するフィナーレとなる。

●W.A.モーツァルト／オーボエ協奏曲 ハ長調 K.314

モーツァルトが作曲した唯一のオーボエ協奏曲であるが、作品の発見は今世紀に入ってからであり、その全容もこの作品の書き直しである「フルート協奏曲第2番」によって知られていたという特異な音楽である。作曲はマンハイム＝パリ楽旅の行われた1778年の春に、ザルツブルグの宮廷演奏家フェルレンディスのために行われたものと推定されており、オーボエのもつ明朗な表情と装飾性が生かされた佳曲である。

第1楽章は晴れやかでエネルギッシュな主題提示部と型通りの簡潔な展開を持つ典型的なザルツブルグ様式の協奏曲。第2楽章の夢見るような柔らかな抒情は、フィナーレでは一転して軽快な楽想に吸収され、オペラティックな華やかささえ振りまく。

●W.A.モーツァルト／ピアノ協奏曲第26番 ニ長調「戴冠式」K.537

モーツァルトのピアノ協奏曲の系譜は、1786年冬の「ハ長調」で事実上閉じられ、残された5年間には2曲が世に出されただけであった。この「ニ長調」は1788年の早春に作曲されたが、ウィーンではすでに演奏の場を得られず、初演は翌年のドレスデン楽旅まで待たなければならなかった。「戴冠式」という標題はこの曲が後にレオポルド二世の戴冠式の折りに演奏されたことに由来しているが、簡潔な構成の中に示された祝典的な華やかさによく寄添うものではある。

第1楽章では颯爽とした主題に触発されたようなピアノの技巧的な表情が際立ち、素朴で愛らしい旋律が淡々と流れる第2楽章に続いて、フィナーレでは力感をたたえたりズミックな運びが、音楽を華やかに盛り上げる。

●L.v.ベートーヴェン／交響曲第3番 変ホ長調「英雄」作品55

ベートーヴェンの音楽の系列において「英雄」は特別な意味を持つ作品と見なされている。この音楽こそ古典的交響曲の流れにくさびを打ち込み、純器乐的形態のなかに、精神的、意思的内容を直接的に盛りこむという革新性を打ち出すものとなった。そこにナポレオンをめぐるエピソードを読み込む必然性はないのであるが、ベートーヴェンが精神の近代性を意識するきっかけとして、ナポレオンに対する関わりがあったことも、また否定できない事実ではある。

この交響曲が作曲されたのは1803年の夏から翌年の春にかけてのことで、時あたかもナポレオンが権力の頂点に立とうとしていた。貴族社会のバトロネージのなかに組み込まれながらも、その封建性に不満をいだいていたベートーヴェンはナポレオンの活躍

に共感を持ち、新作の交響曲を献呈しようとした。しかしナポレオンが皇帝の位に着いたという知らせに激怒し、献呈の言葉を書いた表紙を破り捨てたことはあまりにも有名である。

第1楽章は叩きつけるような主和音の響きのあと、チェロがさっそうとした主題を奏し、入念な経過部を持つ充実した提示部と、さらに壮大な展開部が構築される。第2楽章は自由な3部形式による葬送行進曲。弦楽器が沈鬱な旋律を反復する主部に対し、中間部はさらに荘重な足取りを深め、緊張感にみちたフーガが音楽を劇的に盛り上げてゆく。第3楽章は生気にあふれたスケルツォであり、活発な主部に対して、ホルンの3重奏による中間部は勇壮ななかにも柔らかな手応えを感じさせる。第4楽章は主題と7つの変奏、2つの対位法的な展開部、そして長大なコーダからなる手の込んだ構成を持ち、第6変奏のアンダンテからコーダにかけて、音楽は白熱した高まりを迎える。

●L.v.ベートーヴェン／交響曲第7番 イ長調 作品92

1809年の5月にウィーンに進駐したナポレオン軍の動向はベートーヴェンの生活にも少なからず影響を与え、すでにスケッチが進められていた第7交響曲も一向に進展しない状態が続いた。しかし占領の解除と共に作品全体の構想も急速に具体化し、1812年の5月から6月にかけての5週間で一気にスコアが書き上げられることになった。時はまさにナポレオン軍がロシアへの侵攻を進めつつあった頃で、当時の民衆はその雄渾なリズムと劇的な格調の高さのなかに愛国的な魂の発露を感じて熱狂的な反応を示したと伝えられている。

ただ、同時に初演された交響曲第8番と同じように、この音楽が古典的な理念の下に統一された構成をもつ絶対音楽であることも強調されなければならない。

第1楽章では長大な序奏に続いて、付点リズムの動機に基づく軽快な主題とさらに躍動的な第2主題が現れ、同じ動機を積み重ねながら高揚する。第2楽章では、まず引きずるようなリズムをもった旋律が、美しい対旋律を交えながら変奏され、中間部では緊張を緩和するかのように穏やかな旋律も歌われる。第3楽章はスケルツォ楽章で、荒々しく突進するような主部主題の後、オーストリアの巡礼歌に由来するといわれるトリオの旋律が歌われる。第4楽章では旋回舞踊を思わせる主題が休むこと無く繰り返されて圧倒的な熱狂の渦が作り出される。まさに勝利と歓喜の凱歌といった趣の音楽である。

●L.v.ベートーヴェン／ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調「皇帝」作品73

この作品はベートーヴェンの完成した最後の協奏曲であると同時に、古典派協奏曲中でも最大のスケールをもつ音楽である。作曲は1808年から翌年にかけて行われたが、ウィーンはフランス軍の進駐と占領とによって混乱に陥っており、貴族達も多くは国外に難を逃れていたこともあって、初演は1811年11月末のライプツィヒまで持ち越された。当時ベートーヴェンの難聴は演奏活動を断念させるほどに進んでいたが、その気力には少しの衰えもなく、後に与えられた「皇帝」というタイトルに恥じない気宇壮大な名曲となっている。

第1楽章はオーケストラが主和音の柱を力強く打ち立て、ピアノが分散和音をカデンツァ風に豪快に弾いて曲が開始される。呈示部も勇壮なもので、ピアノがオーケストラと有機的に絡み合いながら主題を有機的に展開してゆく。第2楽章は静けさに満ちた緩徐楽章であり、弱音器をつけた弦楽器が主題を優しく奏し、ピアノが装飾的な音形をこまやかに綴りながらそれを変奏してゆく。音楽は休みなく終楽章へ入り、にぎやかなロンド主題が変奏の手

法もまじえて多彩に展開され、力の減衰と高揚が見事に交錯するコーダとなる。

●J.ブラームス／交響曲第4番 ホ短調 作品98

第2、第3の交響曲を創作力の自然な発露のままにそれぞれ事実上ひとりで書き上げたブラームスも、「第4番」では1884年から翌年にかけての慎重な創造の時を必要とした。ブラームスが目指したことは、彼が敬愛したバッハのスタイルによって新しい交響曲を作曲することであり、そのためにはバロックの音楽語法と大規模なソナタ形式との融合が必要であった。ブラームスは、第2楽章にフリギア旋法を取り入れ、また終楽章をバッサカリアの手法に基づく壮大な変奏曲として構成することによりこの課題を見事に解決し、古典的な技法の持つ多彩な可能性の発掘に成功した。精密な作曲技法と内面的なロマン的情緒が深く溶け合っており、ブラームスのいささか早すぎる交響曲からの撤退を飾るにふさわしい名曲となっている。

第1楽章ではヴァイオリンが哀感のこもった主題を歌い、この旋律の運動性を生かした入念な展開が構成される。終結部において主題が悲劇的に高揚してゆくようすは深い感動を呼ぶ。第2楽章はロマンス風の緩徐楽章で、フリギア旋法風の古風な旋律が伸びやかに歌いつがれていく。またチェロによる第2主題の深い表情はまさにブラームスならではのものである。第3楽章はスケルツォに相当する楽章で、躍動的な主題が推進力をはらんだ旋律を呼び起こすが、このエネルギー感にもどこか孤独な反抗といった影がまつわりついている。第4楽章ではバッハに由来する旋律がバッサカリア主題として提示され、それに続く変奏が人間感情の様々な彩をまるで万華鏡のように描きだしながら、最後まで力感を失わないコーダへと流れ込んでいく。



エルベ河にこだまする、ドレスデンフィルの豊かな響 —— 結城 亨

ドレスデンは日本でいえば京都、奈良に当り、芸術文化の都として知られる。ルネッサンス時代、このザクセン地方の選帝候フリードリッヒ・アウグスト一世の下に建てられたツヴィンガー宮殿を中心に、エルベ河をはさんで多くの教会、劇場、博物館、美術館が建てられ、独自の香り高い文化が開花したのだった。昔から諸外国との交流も盛んで、遠くイタリア・ルネッサンスとも縁が深く、その美しさと相まって「エルベのフィレンツェ」と呼ばれていたことは広く知られている。だがその都も第二次世界大戦でアメリカ・イギリス連合軍の猛爆撃によって完膚なきまでに破壊された。1945年2月13、14日、わずか2日間でこの麗わしの都もただの瓦礫の山と化したのである。

初めてドレスデンを訪れたのは1978年だったが、その頃はドレスデンの顔であるツヴィンガー宮殿こそ再建されていたものの、

他の建物はまだ工事中の所が多く、国立歌劇場はやっと復旧に着手したばかり、宗教改革者ルターゆかりのフラウエン教会も単なるレンガの山でしかなかった。だがそんな中から少しずつドレスデンは着実に立直る。その後何度となく訪れる度に、足取りは遅いけれど多くの建物が僅かずつ修復され、古い絵や写真で見たかつての面影を次第に取戻してゆくのを、いつも応援するような気持で見続けたものである。

芸術の都だけあってドレスデンと音楽の結びつきは非常に古く、かつ深い。この街の音楽と言えはまず聖十字架合唱団、ドレスデン国立歌劇場及びそのオーケストラ（ドレスデン・シュターツカペレ）、そしてドレスデン・フィルハーモニーがほぼ全てを代表する。聖十字架合唱団はドレスデンという街そのものの記録が残る13世紀初めから成立しており、市の中央にある聖十字架教会の附

属合唱団である。ドイツ・バロックの巨匠ハインリッヒ・シュッツ（1585～1672）が宮廷楽長に招かれてからは特にその水準を高め、後にライブツィヒの聖トーマス教会の合唱長になった大バッハもこの合唱団だけは手放して褒めたという。現在でもペーター・シュライヤーやテオ・アダムといった名歌手がこの合唱団出身で世界で最も重要な宗教合唱団である。一方ドレスデン国立歌劇場は1667年宮廷歌劇場として発足したが1869年に焼失、その再建はゴッドフリート・ゼンバーの手で行われ1878年開場した。19世紀のロマン派時代以降はこの劇場の黄金期で、ウェーバーやワーグナーが音楽監督に就任、彼らのオペラ「魔弾の射手」や「タンホイザー」「リエンツィ」がここで初演された。またR・シュトラウスとも縁が深く、「バラの騎士」「サロメ」などが初演を飾っている。この劇場オーケストラは実は歌劇場よりも歴史が古く、最初は1548年ザクセン宮廷楽団として創立され、これが現在のドレスデン・シュターツカペレのルーツである。この楽団を育てたのはやはりシュッツだったが、歌劇場付楽団となってからはやはりこの誉れ高い劇場と共に音楽を共にして来たのだった。

これに対しドレスデン・フィルは比較的新しいオーケストラである。だが新しいとは言っても創設は1870年だからすでに123年の歴史を持つ。19世紀中頃から活発化して来た各地のオーケストラ活動に即応してコンサート専門の楽団として創設されたもので、ブラームス、チャイコフスキー、ドヴォルジャーク、R・シュトラウスらも指揮し、積極的に国外にも演奏旅行し急速にその評判を高めた。現在はシュターツカペレと共にお互いにそれぞれの特徴を生かし、或時は良きライバルとして、或時は補足し合いながらドレスデンの音楽文化を支えている。ドレスデン音楽祭の時はオペラとコンサートそれぞれで活躍、また1978年創設されたドレスデン室内オーケストラは両楽団の優れたメンバーから構成されて

いる。ドレスデン・フィルはまた毎夏6月から8月にかけて、郊外のビルニッツ宮殿でも演奏会を行っている。幸いにも滞在中にそれを聴く機会があったが、やや小編成とはいえエルベ河を望む美しい宮殿の建物や庭園に囲まれて聴くセレナードやオペラの間奏曲は、一層楽しく雅びて響いた。

ドレスデンのオーケストラの音はこのフィルハーモニーにせよシュターツカペレにせよ、或る共通した独特の響を持っている。最近のオーケストラはどれも各パート、パートが鮮明で大変カラフルなのだが、ともすると各パートの主張が強く、迫力はあるがオーケストラとしての響の融和がバラける傾向にある。これを現代的といえるのかも知れないが、その点ドレスデンのオケは弦楽器、木管金管などの音色が常に見事に一つに融け合い、そのブレンドされた響が実に優しい。だが優しいとはいってもそれは決して脆弱な音ではなく、サウンド自体は朗々として力強く、音の質もハンブルグやベルリンなど北ドイツ系の楽団に比べると





かなり明るい。こうした響はもしかしたらドイツでありながらイタリアの影響を強く受けたドレスデンの古くからの伝統なのかも知れないが、いずれにせよ他のオーケストラでは全く聴くことの出来ない「ドレスデン・トーン」とも言うべき大きな特色である。その意味でこのオーケストラは今やかけがえのない世界の宝なのだ。

東西ドイツ統合後のドレスデンは残念ながらまだ訪れてないが、現在旧東西の格差などいろいろ大変な問題を抱えているらしい。やはり半世紀近くも異なる体制下で過してくればいくら同じゲルマン民族でも混乱や摩擦が生じるのは止むを得ない事だろう。だが国立歌劇場修復に当って旧連合国側の援助を断り、自力で9年かけて再建してしまったという骨のあるドレスデンのこと、きっと今後もそんな苦難を乗り越えて、ヴァイグレの指揮の下あの美しいドレスデン・トーンで自らの素晴らしい音楽を語ってくれるに違いない。

若さをにじませるこのごろの ドレスデン・フィル

小山 晃

ドレスデンはとても美しく落ち着いた街だと聞く。私はまだ訪れたことがないから実感として把握しないのだが、このドイツ・ザクセン州の中心都市は、昔から、美術と音楽の街、と言われていた。〈ドイツのフィレンツェ〉と呼んだ詩人も存る。イタリアの古都フィレンツェと似たムードをたたえている街ならば、たしかに美的雰囲気立ちのぼらせているのかもしれない、と思った。日本でたとえば京都みたいなところなのだろうか、とも想像した。京都は平安の昔からの伝統的な美意識が淀んでいるけれども、存外、新進なものもかなり取りこんでいて、古さと新しさが渾然一体となって自然な呼吸をしているようなところがある。ドレスデンという街も、もしかしたらそういうロケーションかもしれない、と感じた。京都なんかと違うところは、先の無謀な大戦で街の中がすっかり破壊してしまったことなのだろうか、とも考えた。ドレスデンが連合軍の激しい空襲で、無残に壊滅したのは、1945年2月13日だから、東京大空襲で日本の首都が焼土と化したときとおっつかっつの時である。

街中が瀕死の状態にありながら、音楽はいちはやく不死鳥のように蘇ったとき。このあたりが日本とは少々勝手が違うのであろう。日本の敗戦後の数年は、音楽を余裕をもって聴いたり楽しんだりすることは考えられなかった、という。こどもごころに覚えているが、確かにそんな感じだった。ぼくはずっと横浜に居る人間で、戦さが終って田舎から帰ってきてみたら、自分の家は

無し、目抜きに繁華街は焼野原になり、一番便利そうなロケーションには、アメリカ占領軍の兵舎が立ち並び、町中をジープが疾駆して行き交っていたのに息をのんだ。これじゃ日本がアメリカたちに負けたのは当たり前だ、と思った。親は子に食べさす食料の調達にあくせくとし、寝む屋根を確保するの

に懸命だった。音楽を楽しむなんぞ思いも及ばなかったに違いない。だから、ずっと後になって、ドイツなんかでは、食や住に苦勞していても音楽に触れるのが人々の何よりの喜びだった。なぞと耳目にしたときは、どだい精神構造が異なるのだろうか、とも思ったのだ。日本の人間だって音楽と限らず絵画でも彫刻でも、京都奈良の寺院建築を見てもしれるように、美的感覚はすごく豊かなはずなのにナ、ともおもえた。

ドレスデンなどではいち早く音楽が復活した、と聞くと、これも人々の内に脈々と息づく伝統の血ゆえか、とも考える。ドレスデンの歌劇場なぞは、17世紀早々には創設されていたのだから、300年余の歴史があるし、ドレスデンのもう一つのオーケストラであるシュターツカペレ・ドレスデンは1548年には最初の響きをきかせたというのだから、えらく古いことになる。日本でいえば天文年間、足利十三代將軍義輝のころには音楽が弾かれていたのだから、恐れ入ってしまう。シュターツカペレの方は元来がドレスデン国立歌劇場のピットに入っていたオーケストラで、やがてコンサートにも進出したのだったが、こちらのドレスデン・フィルハーモニーは、シュターツカペレと比べればキャリアは短いが、



それでも1870年に産ぶ声をあげている。だが、初めからコンサートを第一義にしたオーケストラである。商工会館のホールにこの町の音楽家が集ってアンサンブルを奏でたのがきっかけというから、同じドイツのライブツィヒ・ゲヴァントハウス管と似たところがある。シュターツカペレとは歴史において

及ばないけれども、フィルハーモニーだって、既に120年のキャリアを越した。結構、錚々とした指揮者が指揮台に立ってきている。

また、ドイツの古い街ドレスデンとオーストリーの古い街ウィーンとは、どこか共通したところがあるようにも感じられるのだが、オーケストラもそうだ、とおもう。あのウィーン・フィルが本来はウィーン国立歌劇場のオーケストラで、歌劇場の歴史は1704年に始っているから、紆余曲折はあったにしても、オペラの音楽はその時代から響いていた。その一方で、1900年にコンサートを専らにするウィーン交響楽団が発足している。以来仲良く演奏活動が続いているわけだけれど、ドレスデンの街でも両雄がそれぞれの音楽的魅力をたたえ、多くの音楽を弾いていることになる。フィルハーモニーは国際的にも早くからよそへ進出し、結成の翌年にはロシアのペテルブルグでコンサートをもったし、20世紀の初めにはアメリカ・ツァも持って、ドイツの音楽をひびかせた。国外演奏旅行にも大変積極的なオーケストラなのだ。ちなみに初来日は、1975年で、当時の常任ギュンター・ヘルビッヒがタクトをとっていた。その時に確かに聴いているのだが、オケのパーソナリティがどうだったか、モーツァルトだったかを聴いてウンや

っぱりこれがドイツのサウンドなんだ、くらいの覚えしかない。その後、ドイツ・シャルブラッテンからリリースされたレコードなどで触れて、ドイツ伝統のサウンドをたたえているけれど、音色感には明るさとしなやかさがある、と思った。ドレスデン・フィルハーモニーはこの来日コンサートでは



モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスの曲がプログラムされている。最も安んじて聴ける曲目だし、ベートーヴェンの〈皇帝〉を弾くピアニスト、ペーター・レーゼルもちよっとききもの、とおもう。というのも、以前レーゼルがレコードにしていたラファエリノフの3番のコンチェルトが情と技のバランスがすごくよかったのだ。モーツァルトのオーボエ協奏曲は宮本文昭が吹くし、戴冠式協奏曲はベテラン瓜生幸子が弾く。両方ともドレスデン・フィルだったら相性がいいだろうナと感じられた。宮本のオーボエなど、あのフレキシブルで弾力性に富んだ音色と詩的な歌い口が、ドレスデン・フィルの若やいだ演奏感覚にフィットするはず、と思えるからいたって魅力である。

というのも、今度のコンサートではプログラムされていないのだが、ついこの間、このオーケストラの比較的新しいCDを聴いて、以前よりまた若やいだ、と感じたのである。一つはモーツァルトのホルン協奏曲4曲で、ソロがセバスチャン・ヴァイグレ、指揮が来日の首席イヨグル＝ペーター・ヴァイグレの演奏だったが、これがすこぶる上々で、ホルンのふくよかで聴く者の気持を包みこむようなソロぶりとともに、ヴァイグレ指揮のフィルハー

モニーがまた、とてもモーツァルティアンな演奏ぶりをきかせていた。

けれどそれ以上に気にいったのは、今度のプログラムには組まれてないのだが、もう一つのラヴェル〈スペイン狂詩曲〉アルベニス〈イベリア〉ファリア〈三角帽子〉の演奏だった。指揮は勿論ヴァイ

グレで、これらの曲の音楽再現がまことに活達でリズムの切れもよく、ラヴェルの洗い上げられた感覚美や、ファリアのバトスの奔流が、いいノリで踊り出たのだ。ドイツのオーケストラのフランスものやスペインものなんか重ったるくて聴いちゃいけないだろう、と考えていたのだからまったく不明の至りである。〈三角帽子〉なんか冒頭のリズムから非常に小気味がいい。ドレスデン・フィルの音色のパレットも多彩で、感覚的にも若気の熱さがあふれている。コリャイイワ、と感じ入った。それに音楽が結構情熱的に歌うのである。これはきっとヴァイグレの手腕だ+と思った。たしかに彼は世代的に若いし、ライブチッヒ放送合唱団で歌っていた。そして'85年にはこの合唱団の指揮者のポストに就き、その後30代半ばでドレスデン・フィルハーモニーの首席指揮者となったのだから、腕利きだし、歌わせるのに長け、演奏センスがまことに若々しい。一曲ぐらいいは、ライブでフランス物やスペイン物も聴いてみたい。〈三角帽子〉なんかだったら、熱い音楽が炸烈するかもしれないのに。〈スペイン狂詩曲〉のハバネラなどいいリズム感で弾いていたから、存外〈ボレロ〉などききものかもしれない、などと今イメージをふくらませている。



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie



ドレスデンと大作曲家たち

近藤 滋郎

古都ドレスデンには世界最古のオーケストラといわれる国立歌劇場管弦楽団(一般にはシュターツカペレの名前で知られている)があり、このオーケストラが設立されたのが1548年のことだから、オペラ、オーケストラの歴史だけでも450年近くになる。こうした歴史からみて、この町と関わりを持った作曲家が数多くいるのは当然のことだし、またドレスデンでの活動を抜きにして語るこのできない作曲家は少なくない。

古典派までの大家では、のべ55年にわたって宮廷楽団の楽長をつとめたハインリッヒ・シュッツ (1585~1672)、ナポリ楽派の音楽をドイツに持ち込んだヨハン・アドルフ・ハッセ (1699~1783)、大バッハの長男のウィルヘルム・フリーデマン・バッハ(1710~84)、オーボエとフルートの名手でもあったヨハン・ヨアヒム・クワンツ (1697~1773) などがいる。そしてドイツ・ロマン派の開拓者として知られるカール・マリア・フォン・ウェーバー (1786~1826) がドレスデンの宮廷歌劇場の指揮者になったのが1817年で、傑作《魔弾の射手》はこの地で作曲された(初演はベルリン)。さらには楽劇の創始者リヒャルト・ワーグナー (1813~83) もドレスデンを抜きにして考えられない。このほか、シューマン、チャイコフスキー、R. シュトラウスなどなどドレスデンと強い関わりを持つ作曲家は無数にいる。

ところが、今回ドレスデン・フィルが演奏会でとりあげるモーツァルト・ベートーヴェン、ブラームスの3人の大作曲家は、ドレスデンとほとんど関わりがないという、信じられないような事

実がある。

まずモーツァルトであるが、彼の全生涯の三分の一近くが旅行でしめられていることはよく知られており、3度のイタリア旅行をはじめパリやロンドンまでも足を運んでいる。しかしドレスデンへは晩年にたったの一度しか行っていない。しかもこの訪問はベルリンへ行く途中で立ち寄ったもので、彼の事跡としてけして重要なものとはなっていない。5日ほど滞在しているその間の事情を『モーツァルト年譜』（ヨーゼフ・ハインツ・アイブル編、武川寛海訳）から引用しておく（表記は原文のママ。人名・地名など一部削除）。

1789年4月12日

ドレスデンに夕刻6時に到着。宿舎は〈オテル・ドゥ・ポローニュ〉。同夕、トゥーシェクに会うために軍事顧問官のノイマンの家を訪問した。

1789年4月13日

リヒノフスキー侯とともにノイマン家で朝食をとる。
宮廷礼拝堂における礼拝をすませたあと引き続いて同所で、選帝候の上級楽長ナウマンのミサ曲（「たいへん凡庸な」）が演奏されたが、ここでモーツァルトは〈催し物監督〉のケーニヒに紹介される。彼はモーツァルトに、宮廷で演奏したいと思うか、と聞かれる。

午後（？）非公開の演奏会が〈オテル・ドゥ・ポローニュ〉で開かれ、弦楽四重奏曲と変ホ長調の弦楽三重奏曲（K563）が



演奏され、ドゥシェーク夫人は《フィガロの結婚》および《ドン・ジョヴァンニ》から数曲を歌った。

1789年4月14日

夕刻五時半にモーツァルトは宮廷において、ザクセン選帝候フリードリヒ・アウグスト三世および夫人アマーリエのために、彼女の部屋で演奏をする。彼はクラヴィーア協奏曲 二長調（K537）その他を演奏した。翌日モーツァルトは100ドゥカーテン入った「本当に美しい蓋つきの丸い箱」を賜った。100ドゥカーテンのことを彼はコンスタンツェには黙っていた。

1789年4月15日

モーツァルトとリヒノフスキー侯は正午ロシア大使を訪問した。午後オルガニストのハースラーと宮廷内の教会で競演がおこなわれ、そのあとフォルテピアノにおけるものがロシア大使邸でおこなわれた。晩はオペラに行く（チマローザの〈うまく行かなかった陰謀〉）。そこで、かつて1775年にミュンヘンで〈偽

の女庭師》のサンドリーナ役を歌った歌手マンセルヴィージに出会った。

1789年4月16日（あるいは17日）

詩人ケルナーの父の宗教局評定長官を訪問。ケルナーの義妹シュトックがモーツァルトの肖像を描く（象牙色の紙の上に銀筆で描いたもの）。

モーツァルトは同日手紙でコンスタンツェに「肖像画は続けられているかどうか」と問い合わせる。おそらくこれは（未完のままだった）ランゲの油絵のことをいっているのである。

1789年4月18日

ドレスデンを出発し、マイセンおよびヴルツェンを経てライプツィヒに向い、20日に到着する。

実質で5日滞在しているが、正式の演奏会は一度もないし、作曲を依頼されるといったこともなかった。次の訪問地ライプツィヒでは公開の演奏会を開くなどかなり計画されたものだったのに比べると、ドレスデンはついでに立ち寄ったといった感じが強く、当時のドレスデンの町の隆盛を考えると不思議な印象が拭えない。

ベートーヴェンとドレスデンにいたってはもっと簡単である。1796年2月にブラハを訪問した後に「ドレスデン、ライプツィヒからベルリンに行くつもりだ」という手紙が残されているだけで、実際にドレスデンに行ったかどうか確かな記録は残されていない（弟子のリースはブラハから直接ベルリンに向ったと記して

いる）。

そして3人目のブラームスであるが、彼がドレスデンを訪ねたという記述は日本の伝記類には一切記されていない。しかし、このドレスデン・フィルの公演チラシにはブラームスの名前が明記されているので、彼がドレスデンを訪ねたことは確かなのだろう。しかしそれは指揮者としてのもので、作曲家ブラームスとしてはドレスデンとなんの関わりも持たなかったということになるだろうか。

われわれが都市と音楽家を語るときには、その地の劇場などの音楽監督をしているときは別として、多くの場合が作曲家としての事跡を中心にしている。つまり、ある作品が書かれたとかある作品の初演地といったことに目が向くことが少なくなく、たんに演奏家として訪問していることにはあまり注意を払わない。モーツァルト伝にしても作品が書かれた都市はどんなに小さなものでも記述されるが（イタリアのローディなどほとんど無名の地であるが弦楽四重奏曲の第1番が作曲されたということでモーツァルト伝では欠かせない）、作品と関わりがない都市はそこがどんなに有名であっても一言で片付けられてしまうことが少なくない。

音楽都市としてヨーロッパでも屈指の歴史を持つドレスデンだが、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスの3人の大作曲家についてもこうしたことが言える。ドレスデンという町の音楽的な重要性からは信じられないようなことだが、この3人の作品に関してはまったく影響を与えていないし、初演をしたということもなかったのである。



Since
1978



1993
16th **名古屋**
国際音楽祭

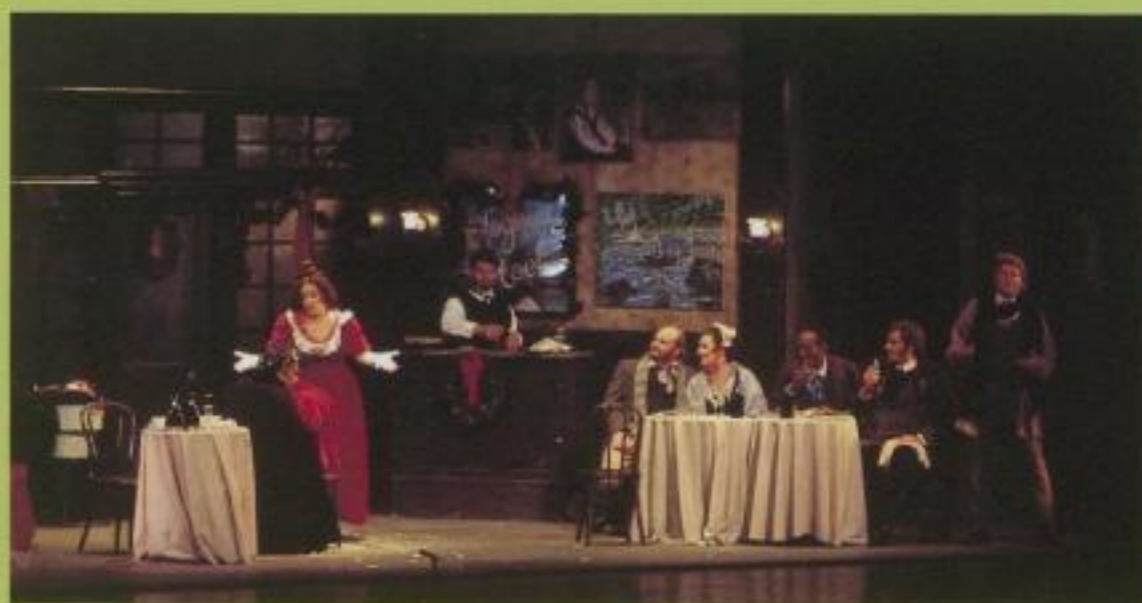
会場=名古屋市民会館 愛知県芸術劇場

主催=中部日本放送・名古屋市

後援=外務省・文化庁・愛知県・愛知県教育委員会
名古屋市教育委員会・中日新聞社

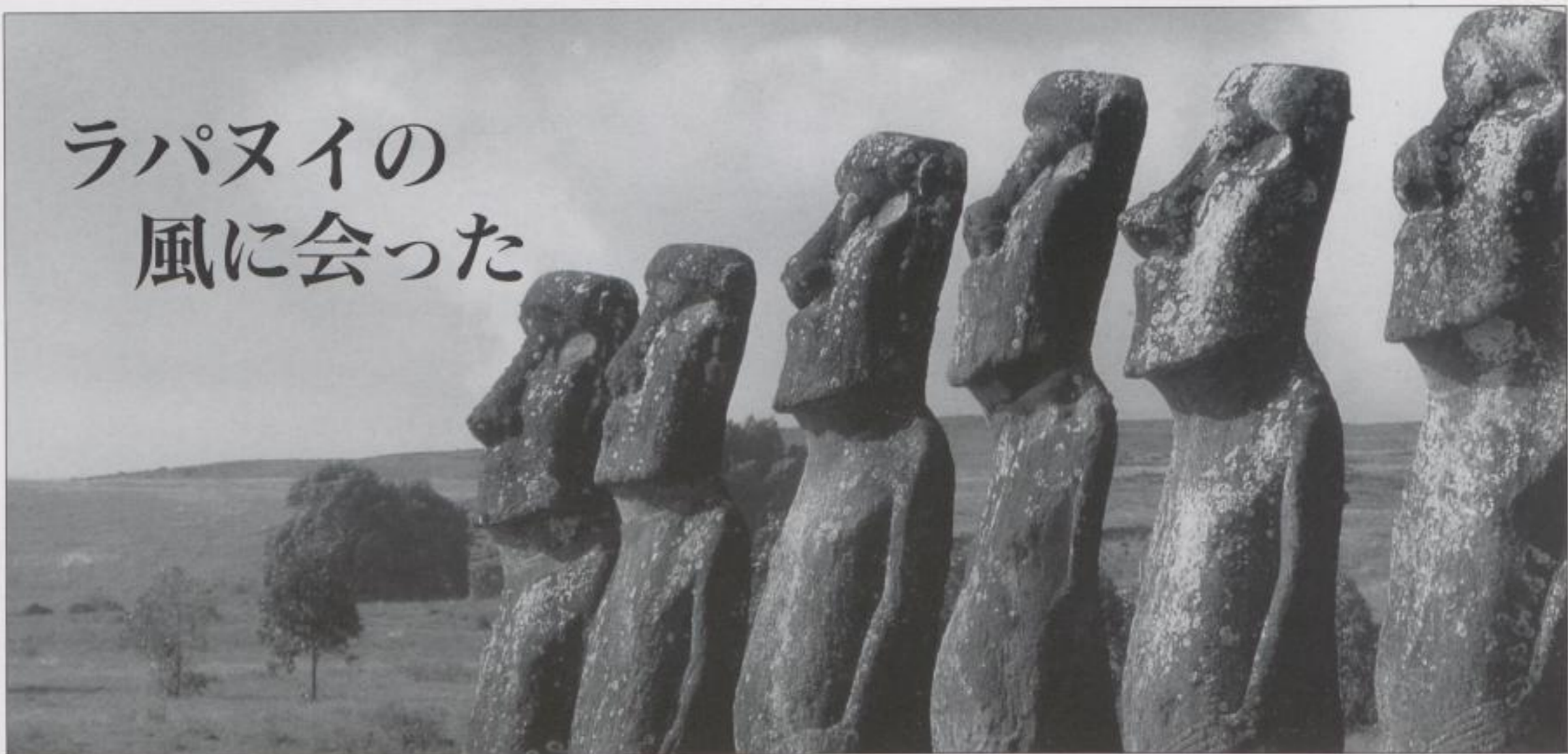
お問い合わせ

中部日本放送文化事業部
TEL.<052>241-8118



- 4/4 | 日 | 2:00 | サンフランシスコ・オペラ・センター
G.プッチーニ『ラ・ボエーム』(4幕) 指揮:パトリック・サマーズ
演出:パオロ・モンタルソロ
会場=名古屋市民会館大ホール
- 4/9 | 金 | 6:45 | ストラスブール・
フィルハーモニー管弦楽団 指揮:テオドール・グシュルバウアー
ピアノ:シブリアン・カツァリス
会場=名古屋市民会館大ホール
- 4/14 | 水 | 6:45 | モーリス・ベジャール『バレエ・ガラ』 演出:モーリス・ベジャール
会場=名古屋市民会館大ホール
- 4/18 | 日 | 6:00 | ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団 指揮:セルジュ・チェリビダッケ
会場=愛知県芸術劇場 コンサートホール
- 5/14 | 金 | 6:45 | フランス・ブリュッヘン指揮
18世紀オーケストラ 指揮:フランス・ブリュッヘン
会場=名古屋市民会館大ホール
- 5/18 | 火 | 6:45 | バンベルク交響楽団 指揮:ホルスト・シュタイン
会場=名古屋市民会館大ホール
- 5/23 | 日 | 6:00 | クリスチャン・ツイメルマン『ピアノ・リサイタル』
会場=名古屋市民会館大ホール
- 5/25 | 火 | 6:45 | 五嶋みどり『ヴァイオリン・リサイタル』 ピアノ:ロバート・マクドナルド
会場=愛知県芸術劇場 コンサートホール
- 5/29 | 土 | 6:45 | オペラ・ガラ・コンサート 指揮:ガルシア・ナヴァーロ
管弦楽:東京フィルハーモニー交響楽団
会場=名古屋市民会館大ホール

ラパヌイの 風に会った



絶海の孤島イースター。
ラパヌイ=大きな島と
人々は呼ぶ。
モアイ像をはじめとする
不可解な伝統と文化。
そんなイメージをよそに
この島の人々は底抜けに
明るく、優しい。

東京発

イースター島とサンチャゴ・チリ旅情9日間

| | 都市・交通 | スケジュール |
|---|-------------------------------------|--|
| 1 | 東京(午後) マイアミ(夜) | 東京より空路日付変更線を通過して、マイアミへ マイアミにて乗り継ぎ、チリの首都サンチャゴへ 機内泊 1泊 |
| 2 | サンチャゴ(朝) サンチャゴ(夕刻) イースター島(深夜) | サンチャゴ到着後、モネーダ宮殿、サンクリストバルの丘、国立歴史博物館などの市内観光 夕刻、空路イースター島へ ハンガロア泊 1泊 |
| 3 | イースター島 | イースター島到着後、ホテルにて小休止の後、巨大なカルデラ、ラノ・カオと異人儀式の伝統のミステリースポット、オロンゴの見学。 昼食後、七人の使者のモアイ、アフ・アキビ、アカウの残されたブナ・バウ、タハイの儀式村、イースター島博物館などの見学。 ハンガロア泊 1泊 |
| 4 | イースター島 | 終日、イースター島の見学。精舎はプラットフォームの残るアフ・ピナブ、日本の技術で修復の進むアフ・トンガリキ、モアイの製造工場 ラノ・ララウと火山カルデラ、地球のへそと呼ばれるテ・ビトクラ、ホツマツア王のモアイのあるアナケナ湖など。 ハンガロア泊 1泊 |
| 5 | イースター島(午後) サンチャゴ(夜) | 出発まで自由行動。メルカード(市場)や教会の敷地をお楽しみ下さい。 午後、イースター島より空路サンチャゴへ サンチャゴ到着後ホテルへ サンチャゴ泊 1泊 |
| 6 | サンチャゴ | 終日、湖と坂の町パライソと南米最大のリゾート、ビーニャ・デル・マルの観光 サンチャゴ泊 1泊 |
| 7 | サンチャゴ サンチャゴ(夕刻) | 出発まで自由行動 サンチャゴより空路マイアミへ 機内泊 1泊 |
| 8 | マイアミ(朝) | マイアミにて乗り継ぎ日付変更線を通過して東京へ 機内泊 1泊 |
| 9 | 東京(午後) | 東京到着後、解散 1泊 |

■旅行代金

598,000円

(大阪発着は15,000円増)

■出発日

5/20・6/17・7/1・8・15

■食事条件：全行程食事付

■添乗員：全行程同行

■最少催行人員：10名

■利用航空会社

アメリカン航空・ランチリ航空

■個室追加代金：48,000円

*詳細は、パンフレットをご請求
ください。

資料請求・お問い合わせは——

運輸大臣登録一般旅行業第75号

株式会社 ジャパンアメニティトラベル 池袋営業支店 / 〒170 東京都豊島区東池袋3-1-3 ワールドインポートマートビル5F

☎03-3971-1971



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie

楽器ひとつから、
舞台装置まで。

日本国内はもとより、海外200カ所におよぶ
ネットワークが、日通ならではの安全、確実、
高品質なサービスをお届けします。



通 日通航空
NIPPON EXPRESS

日本通運成田空港支店
公演グループ

●お問い合わせ・ご相談は、お気軽にどうぞ

Tel.03-5443-2196
Fax.03-5443-3178



WIENER VOLKSOOPER

ウィーン・フォルクスオパー

1993年日本公演

- | | | |
|-----------|-----|------------------|
| 10月20日(水) | 名古屋 | 「マリッツア伯爵夫人」 |
| 23日(土) | 名古屋 | 「メリー・ウイドウ」 |
| 24日(日) | 名古屋 | 「こうもり」 |
| 26日(火) | 大阪 | 「メリー・ウイドウ」 |
| 27日(水) | 大阪 | 「メリー・ウイドウ」 |
| 30日(土) | 東京 | 「メリー・ウイドウ」 |
| 31日(日) | 東京 | 「メリー・ウイドウ」(昼夜公演) |
| 11月2日(火) | 東京 | 「マリッツア伯爵夫人」 |
| 3日(水) | 東京 | 「マリッツア伯爵夫人」 |
| 4日(木) | 東京 | 「マリッツア伯爵夫人」 |
| 6日(土) | 東京 | 「こうもり」 |
| 7日(日) | 東京 | 「こうもり」 |
| 8日(月) | 東京 | 「こうもり」 |

〈詳細は近日発表〉

招へい = 中部日本放送

CBC

CBC



SLUB

Wir führen Wissen.



Dresdner
Philharmonie